

空が赤いから犬が殺される

幼児は、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あの人だあれ」「ここどこ」と質問を連発します。そしてこの質問の答えによって、知識を身につけていくのですから、もちろん、正しくていねいに答えてやると同時に、質問しやすいような雰囲気作りをすることが大切です。

親が気持ちよく答えてやると、幼児はそれが嬉しくてますます質問して知識を増していきます。

ところが、質問をうるさがると、だんだんしなくなり、知識の増大が止まります。忙しい時でも、明るく応答してやり、答えをもらう楽しさを、満喫させてやることです。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、やがて「どうして」「なぜ」というように、物事の原因や理由を追求する質問をするようになります。

それまで、単純に、別々のものと見ていた物事に対して、これに関係づけ、結びつけて考えるように成長したためです。幼児の思考能力は、こうなりますと著しく向上します。

然し、この種の質問は、以前の質問と違って、大変に答えにくいものがあり、説明すればするほど、新しい質問が出てきますので、往々にして親が受け切れなくなります。でも、決してでたらめに答えたり、はぐらかしたりすることなく、応答してやりたいものです。

わからない時には、「さあ、お母さんにもわからないわ。お父さんがお帰りになったら、一緒に聞いてみましょうね」とか、忙しい時には「またあとでね」とか、とにかく、まじめに応答する態度を示してほしい、と思います。

これはソ連の子どもの話です。空が夕焼けで赤かった時、狂犬が射殺される事件がありました。その時から、それを見た二歳半の男子は、赤い夕焼けを見るたびに、自信たっぷりに言ったそうです。

「また、犬が殺されるよ」

二つの現象(空が赤い、犬が殺される)の間に因果関係を見付けようとするこの科学的な思考の芽生えを、尊重してやるのが大切なのです。

この場合、因果関係はないのですけれども、子どもなりに因果関係を見つけ、つけ得たことに満足しています。此れを間違いだと決めつけ

てはいけないのです。

頭から、正しい知識を与えることだけ考えないで、誤っていてもよいから幼児の能力に応じた思考をさせることが大事です。それに、知識というものは、今は正しいとされていても、いつ誤りになるかわからないのです。

ですから、そんな知識を詰め込もうとして、「その考えは誤っている。ほんとはこうだ」と言うことくらい愚かな行為はありません。考える能力を養うことが大切なのであって、幼児の理解を越えるような単なる知識など、何の役にも立ちません。其れは、どんなに詰め込んだところで、幼児の思考力の発達を妨げるだけです。

此の時期には、それまで「……する」「……だ」という単文しか言えなかったものが、「……だから……する」「……なので……だ」という複文が使えるようになります。